

目次

北部仏印進駐秘話	小池竜二・澄田謙四郎・前田雄二	7
日ソ中立条約成る——松岡電撃外交の真実——	加瀬俊一・岡村一二	20
ゾルゲ事件回想	Iゾルゲと私 川合貞吉・石井花子	12
	IIゾルゲ事件と私 大橋秀雄・植田敏郎・生駒佳年	57
南太平洋スパイ行	豊福徹夫	66
太平洋戦争 開戦前夜	Iその前夜の内閣書記官長 星野直樹	76
	II開戦決定の御前会議 井野碩哉	89
	III日米交渉成らず 西 泰彦	100
	IV一二月八日と私……茂木政・石垣綾子・岡本太郎・幸田文・田中角栄 加藤 祥	108
客船竜田丸決死の航海——太平洋戦争開戦秘話——	加藤 祥	120
ニイタカヤマノボレ——二〇八——真珠湾攻撃から24年——……惣留繁・源田実・藤田怡与蔵・三都優		130
われ、英東洋艦隊を撃滅す——マレー沖海戦——	老成春記	142
文士従軍——マレー作戦従軍記——	井伏鱒二・堺駿一郎・中島健蔵	152
イエスカノーか——シンガポール陥落——	菱刈謙文	166
シンガポール攻略のかけに——従軍記者の回想——	酒井寅吉	174
天降る神兵——メナド奇襲降下作戦——	角田求士・花沢藤太郎・本間金吾	184
エンタープライズに挑んだ漁船——東京初空襲のかけに——	ジュイコブ・D・シニザー・矢口良雄・中村末吉	196
翼賛選挙は無効ノ——自由を守ったある判決——	下村栄二・吉田久	200
ロハス大統領救出秘録	神保悟彦・今井欣三郎	220
珊瑚海海戦漂流記——空母「祥鳳」報道班員の回想——	天藤明・吉岡専登	234
ミッドウェー海戦——完敗した連合艦隊——	京鹿竜之助・源田実	246
キャンパスと戦争と——召集された画家たち——	田村孝之介・上島長健	250
白人婦女子抑留所長だった私	山地正・森田たま・山口愛次郎・岡島鳴海	268

映画「ハワイ・マレー沖海戦」と私——戦争とカッドウヤ——	山本嘉次郎・田谷英二	278
召集令状・一銭五厘の命	野間宏・神戸達雄	290
死闘ガダルカナルI血と飢えの島	家村英之助・亀岡高夫・上井宏	300
II「転進」という名の退却	高崎伝	314
われ、米本土を爆撃せり——東京初空襲の返礼——	田上明次・藤田信雄・榎幸	320
〔太平洋戦争—前期—〕	高田豊平	330
〔年表〕		337

〔解説〕

開戦が六日後に迫っていることを一般国民が知るよしもない昭和十六（一九四一）年二月二日、将校とも、兵隊とも、はたまた民間人とも判別しにくい一団の人々を乗せた輸送船が大阪を出港した。もちろんその中のだれ一人として自分がいったい何の目的でどこへ連れて行かれるのか知っている者はいなかった。やがて彼らは南へ向かって航海を続ける船の上で二月八日の開戦の日を迎え、自分達が、まさにその戦場へ送られようとしていることを知ったのである。

一行は、乗船する約二週間前、突然一通の令状によって陸軍から出頭を命ぜられた作家、詩人、画家、編集者たちだった。そして追いうちをかけるように二月には第二陣が、二〇日には海軍が作家三名、画家三名を含む四六名を召集したのだった。

これは総力戦体制に備えて陸海軍が、従来の従軍記者にかわるものとして考えだした報道班、宣伝班制度のスタートだったのである。

法にあった。この法律は勅令一本で國防目的達成のためには人・物いづれを問わず思うがままに動かすことのできる、恐るべき威力を備えた法律であった。その第四条には「政府ハ戦争ニ際シ國家総動員上必要アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ帝國臣民ヲ徵用シテ総動員業務ニ従事セシムルコトヲ得但シ兵役法ノ適用ヲ妨ゲズ」とあり、この中の「総動員業務」については第三条の九項目中第七項に「國家総動員上必要ナル情報又ハ啓発宣伝ニ関スル業務」と規定してある。

153 文士従軍

そしてこの総動員法に基づいていわゆる文士の徵用を行なったのが内閣情報部だったのだが、その前身である情報委員会が誕生したのは、二・二六事件をきっかけに軍部大臣現役制が復活し、陸軍が内閣の死命を制する力を持ち始める昭和十一年だった。そして戦時体制への國論の統一、言論統制の強化をはかるため、翌昭和十二年四月一九日には内閣に情報部を新設することが決定され、九月二五日に内閣情報部が発足した。さらに強力な一元化を目指して、内閣の一局として情報局に昇格したのが昭和十五年二月六日、一部が企画、二部が新聞、三部は国外情報、四部検閲と組織化され、言論情報界の総元締めとなったのだった。そして陸海軍からそれぞれ部長クラスを送りこまれて、開戦後も大本營発表以外の情宣活動をとりしきること

しかしこうして作家が戦場へかり出されたのは、この時が最初ではなかった。日中戦争が始まって一年日、漢口大会戦をひかえて文芸陣に動員令がくだったことがある。昭和十三（一九三八）年八月二十四日の東京朝日新聞によると「漢口陥落を描けと 文芸陣に『動員令』」

陸海空に二〇人従軍

漢口大会戦を日随に控えて内閣情報部では画期的に文壇を動員して、長期戦下の民論昂揚に乗り出すこととなり二三日午後三時から内閣情報部会議室に、文壇の人々を招いて懇談会を開催、この旨発表した」

そしてその会議には文壇側から菊地寛、久米正雄、吉川英治、白井喬二、横光利一、片岡鉄兵、尾崎士郎、佐藤春夫、吉屋信子、丹羽文雄の諸氏が出席、文壇から二〇名のベンの戦士を送るという内閣情報部の文壇動員計画が発表され、出席者こそって賛成、ここに文章報国の態勢が整えられることになった、とある。この動員令の法的根拠はこの年三月に國會で成立し四月一日公布となった國家総動員

になった。

そこで開戦の際の文士徵用を海軍の場合にみると、作戦と報道の一体化をはかる新しい制度の研究に着手したのは開戦の年の四月だった。ドイツのPK部隊（宣伝中隊）をモデルに次のような案がつけられた。

一、身分は海軍々属とし、學歷・年令・社会的地位に応じた待遇が決められる。
二、採用は徵用令状による。
三、徵用期間は三か月を一期とし、特別の者は二年とする。

四、班別は、記事班、普通写真班、映画班、作家班、絵画班、無電班、ラジオ班、検閲班とする。
五、方面艦隊を配属先としてここから航空隊、水上部隊、潜水艦等に派遣される。

以上の要領に基づく海軍の第一回の徵用令発動は二月二〇日、召集日は二七日だった。まず海軍が報道部の前線組織として報道班の名称をつけると、陸軍もそれに習った。

こうして徵用令状によって報道班員として前線に赴いた者は海軍の場合、終戦までに約八〇〇名にのぼり、その中には石川達三、海野十三、角田喜久雄、丹羽文雄、村上元三、山岡莊八、木村莊十、坪田譲治らの名があった。

△証言者▽

井伏鱒二 明治三一年広島県に生まれる。早大英文科中退、一時日本英校に学び『世紀』『文学界』等同人となり、新興芸術派として出発。受賞は昭和二年「ジョン万次郎漂流記」で直木賞、昭和三年「深民宇三郎」で芸術院賞、昭和四年「野間文芸賞」、文化勲章受賞。作品に「多岐古村」「本日休診」「貸間あり」その他。

堺駿一郎 明治三八年、長崎に生まれる。早大仏文科を左翼運動のため中退、三好十郎氏らとの親交が始まる。昭和八年中央公論入社、昭和二一―二四年北滿に赴任、昭和二六―二七年マレー、北ボルネオ従軍、昭和一九年再度召集を受け、広東で終戦。世界評論社を経て昭和三〇年日本文芸家協会事務局長。著書「キナールの民(北ボルネオ紀行)」等。中島健蔵 明治三六年東京に生まれる。昭和三年東大仏文科卒、昭和九年同講師、戦争中マレーに従軍、戦後は主として社会評論、文芸評論を執筆、東大で仏文学を担当、現在は日中文化交流協会理事、著作権協議会議長。著書に『現代作家論』『アンドレ・ジイド』『昭和時代』『自画像』ほか。

—— 微用ということは前例があつたんでしょうか。

井伏 あのところは、微用といえは旋盤工なんです。私は小田巖夫君と富士川を下ろうと思つて、甲府の宿にいた時

よね。

井伏 ええ、それは申し出た人だけ。

—— というのは健康に自信のない方……。

堺 ええ。

—— で、その身体検査ではねられたという方もいたわけでしょうか。

堺 太宰治さん、島木健作さんは、その時申し出てはねられたんです。あとは全部、その時変な紙を渡されて、それが微用令になつてゐるわけです。そして微用令には、甲乙丙丁と記号がつけられていまして、後になつてわかつたのですが、甲がジャワ、乙がフィリピン、丙がビルマ、丁がマレーというふうに分かれていて、井伏さんと私もは丁班でマレーに行つたんです。しかしその時は何もわかりませんでした。何しろ太平洋戦争が始まる前ですから……。中島 その時ね、微用令っていうのはね、ふつう兵隊さんのは赤紙が来たでしょう。それをね、白紙といつたんです。紙が白いんですよ。

—— そうですか。中島さんがそれをお受けになつたのは、もう少しあとと伺いましたけど……。

中島 僕なんかは、年が明けてからでした。

—— じゃ、戦争が始まつて翌年になつてから。中島 始まつてからです。

に、電報が来ました。「急用あり、すぐ帰れ」という電報が。あくる日帰ろうと思つていると、郵便局長から電話がありましてね、「急用ありの電報を受け取ったか」「受け取りました」「誰かに受け取ったか」「受け取りました」そうすると「あの急用は公用のまがいだから」と。ところが公用というのは、当時、微用ですからね、小田君と旅館の図書室の辞書を見て、旋盤工というのを引いたんです。鉄なんかを削ることだ。そうしますと、その旅館のおかみさんの姪という若いのがいましてね、一四、五の。あんな老人が旋盤工になるといつてゲラゲラ笑うんですよ。小田君は僕に「気の毒ですね」と言つた。そこで宿を出ようとすると、小田君にも来てゐることがわかつた。二人とも、富士川下りどこじゃなくなつた。

—— 堺さんも、編集者としての微用をお受けになつたわけでございますけど、最初に集合なすつたのはどこですか。

堺 本郷の区役所なんです。作家も新聞記者も、編集者も通訳の人も、全部で二五〇人ぐらいいましたね。

井伏 僕の組は二〇名。

堺 ともかく朝九時に集合だというんで、行つてみたら、知つてゐる顔がいっぱいいるんです。で、「何だろう」ってみんな話してゐるうちに、簡単な身体検査をやりました

—— その時はもう微用ということはわかりましたか。

中島 ええ、だけどね、まさか自分にまで来ようとは思わなかつたですね、卒直に申しますと。

—— と、中島さんのグループが選れたというのは、何か

中島 いや、第一陣……そのあとの第二陣がわれわれで。

—— ご一緒にどういふ方がいらしたんですか。

中島 僕達と一緒にいたのは、北川冬彦君とか神保光太郎君ね。

—— 詩人ですね。

中島 ええ、田中克巳君も一緒にいた。

—— 評論家としては。

中島 場所が違いましたがね。三木清、清水幾太郎なんていうのが一緒にいた。

—— そうすると、いかがでしょうか、先に出かけられた

井伏さんや堺さんの噂は、いくらか伝わってましたか。

中島 いや、たいへんな噂が伝わってきたんです。

—— たいへんな噂と申しますと。

中島 うまくいってないという噂ですね、簡単に申せば。

—— 何か私どもは……有名な文士や編集者たちが微用で出かけられたんだから、たいへんご苦労なことで、微用した軍隊の方では、まだ初めで、戦争の景気のいい時でござ

いますから、さだめし手厚くもてなしたんだろうということを考えたんですけど。

井伏 輸送指揮官もどう取り扱っていいか、わからなかったらしいです。

—— そうですか。

堺 私は兵隊の経験がありますから、どういう扱いかわかるんですがね、ともかくいちばん下級の兵隊が着る服を着せられて、肩章も何もなし、袴ももろろないんです。ですから、ともかく軍夫扱いという感じですね、最初。だから自分たちで炊事場へ行って飯あげというのもあるし、不寝番ももろろやるし、すべてが軍夫扱いで始まったんです。

井伏さんも最初、そういうことをなさったんですか。

井伏 ええ、みんなと一緒にやりました。私は二〇人中で年令が上から二番目でした。栗原信という絵かきさんが私の上で……二番目でした。老兵の方です。

—— そうしますと、二月八日に戦争が始まったということをお知りになったのは、船の上ですか。

井伏 ええ、航行中に、ちょうど台湾と香港の中間を走っている時に、ハワイ空襲の無線がはいったのです。それから灯火管制ですね。



マレー戦線で小休止中の報道班員。左端、堺誠一郎氏

—— 何か船中で、皆さんで新聞を出しておられたということを知りましたんですが。

堺 それはね、徴用された二〇人の中に、新聞社や雑誌の連中がいますんでね、乗ってすぐに何か出そうじゃないかという話が出ましてね、乗って二日目から出し始めたと思います。

井伏 ガリ版なんか、だれから——。

堺 ええ、ガリ版は船から借りたと思います。で新聞の題名を何にしようかということになって、南の方に行くらしいということはわかったんです。まだ開戦前ですから……じゃ「南航ニュース」と、それは、ナンコウは難儀する、の難にも通じるというので、南航ニュースということにしましたね。一日一回発行でそれを出したわけです。

—— で、上陸はどちらに。

井伏 ええ、サンジャックに。

—— サンジャックというのは、今のベトナムの手前の所でございますね。

井伏 ええ、そこからサイゴンへ行って、高見順君、豊田四郎君、倉島竹二郎君達は、そこから陸路をビルマに向かい、われわれはさらに船で運ばれて、タイ国のシンゴラの港に上陸しました。

でマレーにはいったわけですね。

井伏 あそこは海はたいへん浅なところで、巻波のためにランチが沈むことがあるそうです。私達が行った時、ランチで輸送する兵隊が、お前さん達は運がいい。こんな日はあつたにない。こんな波の静かな日は——と言ってました。

—— じゃ、上陸前後にいろいろの攻撃を受けるとか、危い目に会うというようなことはございませんでしたか。

堺 ジャワ組は上陸直前、潜水艦にやられて、阿部知二さん、北原武夫さんなども海に放り出されて、油のまじった海を泳いで上陸された、とあとで聞きました。が、私どもはそういうことはありませんでした。航行中一度潜水艦が来たという噂がありましたけど……。

—— で、向こうへ上陸していちばん長くいらしたのがシンガポールでしたね。それは、報道班員という名目ですか。

井伏 いいえ、宣伝班員です。報道班員というのは、また別に新聞社や雑誌社から派遣されて来た人達です。

—— どういうお仕事ですか。

井伏 私なんか、軍の進んだあとを歩き、二月一五日にシンガポールが陥落して、一六日に入城しました。一七日から新聞社に勤めました。



井伏二兵衛氏（左）が社長だった「タイムス・ストリート」

中島 井伏さんが英語の新聞の「ストリート・タイムス」という接収した新聞社の社長になっていた。ところで、彼が英語ができるからそうなった、というのも問題だというわけだね。これはどうも無理な話だ、これは何だかおかしいぞというのが、われわれ後統部隊のところでも噂になっ

まず驚きでしたねえ。(笑) その自動車というのがね、弾に当たった自動車だね。ドアをあける時、カランカランと音がして、弾が残っているんですよ、まだね。それからおりて来て弁当箱をぶらさげて、井伏さんが上がって来たんです。で、僕がつい、「なにぶんとも、よろしく頼む」と言っちゃったらしいんだな。

—— ああ、中島さんが。

中島 ええ、それが今だにどうもね、何か僕が大きなことを言うと、「お前は俺に、なにぶんともよろしく頼む、と言ったぞ」と言われてね。——「もいないだ。(笑)」

—— でも、あとから中島さんがいらして、井伏さんもほっとなさいましたでしょう。

井伏 ええ。僕は中島君に突っかえ隊になってもらったね、助かったですよ。

堺 その点、中島さんは僕らを助けに来るようなつもりでいらっちゃったらしいですよね。

中島 まあ、作家とか編集者とかの微用の人達がね、非常にみじめな目に会っているというデマ……デマ……というか、事実そうだったんで、堺君なんかは、絵かきのこの間亡くなった栗原宿さんの小隊にかくれていたし、井伏さんは新聞社の社長ついででしょう。これはおかし……その前に話があるんだなあ。何か船の中で、いろいろひど

たんですよ。

井伏 で、通訳に全部任せました。

井伏 ああ、その点ではご心配はなかったわけですね。ところが現地の陳情団が来た時、困りましたね。陳情団と申しますと。

井伏 まあ日本の兵隊……補助憲兵が悪いことをする。前線を行った兵隊は気が立っているから、市内には入れないんですが、補助憲兵は市内のバリケードのわきに立っていて、夜になると悪いことをするとうんで陳情団が来るんです。それは、ああいう占領下の植民地ではジャーナリストが頼りなんです。多分そうだろうと思うんです。ところが英語でしゃべる陳情の人に受け答えができないんです。いつも通訳がいればいいけども、こういうのに相手できないんで、それで神経衰弱になりましたね。そのころ中島君が来たんですよ。

中島 それで、実は井伏さんに頭が上がらないんですよ。こっちは着いたばかりで様子がわからないしね。僕と神保光太郎君と二人で井伏さんの留守中の部屋に着いたとき、動きがとれないんですよ。そこへ井伏さんが帰って来たんですよ。

井伏 雨が降っていた。

中島 で、井伏さんが自動車に乗って帰って来た。これが

い目に会った話も聞いたんで、そこで僕達は大阪に候禁されていたんですが、いよいよ同じ方向に行くというんで、これはやっぱりわれわれ後統部隊が救援しなきゃならんというふうなつもりで行ったんですよ。救援どころか、まず最初に「なにぶんとも、よろしく頼む」と言っちゃった。(笑)

井伏 僕が「見物に来たのか、視察に来たのか」と言ったら、「いや、俺も微用だ」としよけてました。(笑) ベッドヘクタッと寝てました。私は疲れていて、兵隊の飯ごうを持って、裏階段から上がってびっくりしました。いきなりで、前ぶれもないんですよ。

—— 堺さん、現地の軍人と微用で行かれた皆さんの間は、どういうふうでしたか。

堺 微用は微用で、一グループになっていましたから、直接の交渉はなかったんです。その点はよかったですよ。ただ上官とか、監督者は全部軍人ですからね。宣伝班長の河野中佐という人は、三好達治さんと幼年学校から士官学校まで同期だった人で、非常にいい人でした。しかし准尉あたりには非常に気合いをかけられるんです、みんな。敬礼演習なんかやらされてね。

—— でも、みなさんの待遇は將校待遇じゃないんですか。堺 それがわからないんですよ。いつまでたってもね。

—— それでは、いらっしゃる時に何か位階勲等と申しますか、待遇が決まっておりますからいらっしゃったんじゃないんですか。

堺 いや、現地に着くまでは何もわからないのです。前に言ったように、軍夫なみの扱いで。一応身分らしいものが決まったのはシンガポールにはいって、大分たつてからで、それでも里村欣三さんなんか、下士官待遇という状態なんです。

—— そうですね。と、だいたい向こうでお受けになった感じでは、どのくらい、兵隊の位で申しますと、どのくらいでした。

堺 最後にはね、だから准尉の上、少尉の下くらいにはなつたんでしょうね。

井伏 とにかく、その程度になったでしょうね。

—— 准尉から少尉に、たいていなれそうなるんですけどねえ。その間というものがあつたわけですか。

堺 とにかく私共の上の監督者として、少尉がごろごろ何人もいましたからね。

—— でも日常生活は、それほどご不自由はなかつたわけですか。

堺 ええ、シンガポールにはいってからは、それほど不便はありませんでした。ただ戦争のあとですから、電気はつ

—— 直立不動で敬礼をしないからと言っておこつたわけですか。

井伏 私は入口を背中にして、タバコを吸っていたのです。僕の部屋は志願した少年兵が二人いましたね、これはドアの方を向いてますから、起立して敬礼したんです。で、僕が後ろを向いた時は、もう将軍はいない。何だろうとのぞいてみたら、ちょうど将軍が廊下の行き当たりで、ぐっとこちらを振り向いたので、見つかつたんですよ。

—— ああ、目が合っちゃつたんですね。

井伏 将軍は僕の部屋に引き返して来て、「兵士は……軍人は礼儀がだいじだ。こんな者、追い返せ」と叱つた。僕は帰してもらえかなあと思いましたがね。それで「ハイ」といった声で、僕がうちの長男を叱る時の、長男の声とそっくりになりましたね、それが情けなかつたですよ。

(笑)

中島 その時に僕は初めから逃げちゃつた、実は。逃げたというの、つまり、その場になかつたんですよ。帰ってみるとたいへんな騒ぎなんです。軍司令官にじかにおこられたらね、ふつうの軍人だったら切腹ものなんです。僕はやっぱり将軍の軽々しい行爲だと思つたんですよ。ところで、井伏先生がいらないだね、どこへ行つちやつたんだか。とにかく戦地ですからね、シロツクに違いな

かない、水道は止まっているし、風呂にははいれないというんで……。よく町の大通りに砲弾穴があるんですよ。そこにスコールがたまっているのに、裸ではいったりなんかしましたけどね。

中島 僕達がシンガポールにはいった時でも、まだ地雷がありましたね。これは全部掘つたというんだけど、自動車をバックさせると、その地雷にぶつかつて、自動車のお尻とばされちゃつたという話もありました。

—— 有名な山下華文将軍が——何ですか、井伏さんのお書きになったものをちょっと拝見いたしましたら——何か、山下さんにどなられたというような一幕があつたと思いましたが、あれはどういうわけなんですか。

井伏 将軍が視察に見えただけで、不意にね。そして僕が叱られている時、箭向かいの部屋を見ると、窓はあけ放しだもんですから、里村欣三君と堺君が、事務をとるようなまねをして、しきりに帳面に何か書いている……まだ命令が出てないのに何か事務をとるようになつてしまつてね。僕は将軍に叱られているのに、あそこはたいへんに平和だなあと思ひまして……。

—— どうして叱られたというわけですか。

井伏 将軍が部屋をのぞいたとき、僕は敬礼しないでタバコを吸つてたんですよ。

いし……そこで捜索ですよ。二日くらいか、一晩かなあ

井伏 いや、宿舍にいたんだよ。

中島 いたつて行方不明だよ。要するにしばらく姿を見せなかつたんだな。

堺 たまたまね、私はね、廊下を隔てて前の部屋に、里村欣三さんと二人でいたんですがね、山下華文がともかく、ほんとに地団駄ふんでおこつてるのが見えましたよ。廊下を地団駄ふんで、でかい声でおこりましたよ。

—— それはあとで降伏のね、敵将を迎えた時の、あの一場を思えば想像できますね。

堺 話は前後しますけどね、船の中で出していた「南航ニュース」というのはね、途中で発行停止になつたんですよ。

—— 何か筆禍事件でもありましたか。

堺 それは、たとえば川柳みたいなものに、「将校待遇と聞いては来たが来てみりゃ……実際には何かわからん」というふうな歌もありますしね。ともかくね、輸送指揮官の気に入らないんですよ。で、最後には新聞記者二人と、通訳として徴用された大阪の貿易商というのが三人、輸送指揮官にとり入つて、その部屋に入りびたりになりましたね。「だれを前線に出そう、あいつをどうしよう」と、どうも

案配しているらしいんですね、だれにも相談しないで、それを風刺して童話を書きましたね。

井伏 あんたが書いた。

—— 堺さんが。

井伏 それがね、寺崎浩君が書いたと誤解されましたね、寺崎君がすいぶん、何ですね、困ってましたね。

中島 そういう噂も聞きましたね。堺君は軍隊の経験がある。だから上官というものが、どんなにすごいものか知ってるんですよ。ところが徴用の連中は、絶対そういうことがわからなかったんですよ。

堺 私や里村さんは、兵隊の経験がありますが、それからみると海音寺さん、井伏さんをはじめ、新聞記者の連中も、全然輸送指揮官のいうことを聞かないんですよ。輸送指揮官は中佐なんです、ふつうの兵隊だったら口もきけないんですよ。ところが皆さんは、その言うことを全然聞こうとしないんです。それまでに船の中で、みんないるんな物を……配給品をもらったのですが、飯糰と柳といって、柳行李の小さいようなやつで、飯がくさらないために、そういう弁当箱ができていますよ。それをもらっていただけです。ところが皆はもらったものを全部、荷物の中に叩き込んでしまったわけですよ。ところがサイゴンにはいる前日、それを出せという命令が出ましてね。海音寺さん

—— ああ、行方不明のね。

中島 行方不明だとは、初めはわからなかったんです。したら第一陣の諸君が言うには、「それは華僑大虐殺だ、それへのいやがらせだ」と言うんですね。それが、僕にはやっぱり戦争中のいちばんのショックでした。

—— 大虐殺というのは。

中島 良民証をやるってだましてね、抗日分子とそうでないのを分けるつもりで、そんなことはわかりっこないんですけどね。いいかげんな華僑が、いいかげんに分けたいらしいんです。それを知って僕の人生観も変わったしね。僕は今、中国問題に首をつっ込んでいますが、実は、それが原因なんです。これはえらいことをしたものだと思っ

ね。—— その大虐殺というのは、あれですか。ごく最近問題になりましたね、雅名外相が現地へ行つて、いろいろと話をしたという……。

中島 そうでしょうね。

—— それでは、現地では、だれ知らぬ者もない事実です

ね。中島 ええもちろん、知らぬどころじゃないですよ。そのほかにもいろいろひどいことがありますね。そういう状況の中だから、井伏さんも堺君もたいへん元気にみえなく

はじめ皆しまっちゃった物を、今さら出せるかって、いうことを聞かないんですよ。

それと、今の記事と両方で、ともかく反軍思想があるから、発行停止ということで、サイゴンに着く前の晩、全員キャビンに集められて、「お前ら、全部サイゴンの憲兵隊に引き渡す」と言われました。サイゴンでは憲兵隊には渡されなかったけれども、マレーに上陸してタイピンというところで、軍司令部に追いついて、その指揮下にはいるとき、参謀長の鈴木宗作中将が「お前らは反軍思想の持ち主だそうだが……」と言いました。輸送指揮官が報告したんですね。

—— 中島さんの現地での経験で、何かとくに……異常な経験ばかりと思われませんが、とくに何か特筆すべきものがありますか。

中島 それは何といつてもね、僕がシンガポールにはいて、井伏さんに「よろしく頼む」と言った、すぐ直後ですけどね。どうしようもないんで一人で往來を歩いていたらね、これは広東あたりの出身の婦人だったろうと、今考えてそう思うんですがね、若い青年の写真をつきつけて、中国語で何か言うんですね。全然わからないんで、それで通訳の人に聞くと、「これは自分の子供の写真だけど、どこにいるか知らないか」と……。

らいで、初めは僕も「どうかよろしく頼む」と言っただけで、あとではやっぱりわれわれを囲んでいるような問題が起こったわけですよ。

—— 井伏さんは「花の町」という連載小説を東京日々新聞に連載なさいましたが、これはシンガポールで……。

井伏 そうです。

—— じゃ、かなりお忙しかったわけですね。

井伏 いや、そのころはもう、とくに英字新聞社やめましてね。毎日新聞に……大本営命令としまして、当時の学芸部長が書けといつてきて、軍命令で書いています。一日に三枚書けばいいのですが、暑いのであくびをしますと二枚しかない。見ると、空に伸ばした手首についてるわけですよ。

—— 何がですか。

井伏 原稿が、原稿用紙がね。(笑) そんなことが二、三回ありました。

中島 でも、うれしかったのはね、小説を書き初めてから井伏さん、まるで元気になるっちゃった。

—— そうですか。

井伏 一回、中島健蔵とおぼしき人の演説するところをね、中島君に演説してもらって、その通り筆記しました。おかげで一回、助かりましたよ。演説する途中、「かつこ



シンガポール(昭和と改称)市内キャセピルを背に
前列左から2人口原さん、後列右端井伏さん。

をして、ここに靴の音を入れる」と、中島君はちゃんと指導してくれるんです。(笑)

堺 「花の町」という題もたしか中島さんがつけられたんですね。三軒長屋のいちばん端の一軒に、井伏さん、中島さん、神保光太郎さんが一緒に住んでいたのですね。

—— いかがでしょう。そろそろ時間もありませんけれども、当時を追想していただきましてね、ひどい目に会ったというの、いつわらざるお気持ちだったろうと思うんですけれども、その被害者意識と申しますか、そういうようなものが、今でもいちばん強くお残りになっているのじゃない

も同じだったと思えますね。その造語はないですからね。

—— なるほどねえ。で、お帰りになりましたのが、井伏さん、堺さんのほうが先だったわけですか、中島さんより。

井伏 僕の方が一足先でした。

—— 中島さん、お帰りになったのが、昭和一七(一九四二)年暮れあたりでしたね。

中島 ええ、暮れですね。ほんとうは戦争はもう絶望的な状況でしたね。

(昭和四二年二月二日放送)

参考文献

中島健蔵著「昭和時代」昭32 岩波書店

宮永藤吾著「大本営発表・海軍編」昭27 青潮社

いんでしょうか。

中島 一方でそれがあるけど、それと同時に僕はやっぱり、自分が人を殺した覚えもないし、何もひどいことはしなかったんだけれど、国民として考えとね、まさに自分個人としては被害者だけれど、やっぱりわれわれは加害者だったんだなという認識が、戦争へ行ったらおかげであるんですよ。それに因するいろいろな感想があるわけですね。

—— まあ井伏さんは、もしこういうことがなければ、おそらく戦争に直接、戦地へお出かけになるようなこともなかっただろうと思えますけれども、作品の系列の中で、やはりこういうことがあったためというような自覚がおありでいらっしやいますか。

井伏 その時その時に……、一度にまとめて書きませんでした。そのつど、いくらかその気持ちがあったことは確かです。こんな気持は。初めのころ、宣伝班の者が「大東亜共栄圏」を作るといつて演説をしましたが、どうもちょっと今思い出しても、はずかしくてね。マレー語では、そういう言葉はないから、通訳が「だいじょうぶ、おまんま食べさせてやる」と言っていましたね。

—— 「大東亜共栄圏」ということをですか。

井伏 ええ、それはマレー語で言えないもんですから「だいじょうぶ、ご飯食べさせる」。それはフィリピンなんか

△井伏鱒二氏・中島健蔵氏に会って▽

井伏 鱒二氏がテレビにお出になるのは非常に珍しい。文化勲章をお受けになった矢先きでご多用中の井伏氏をスタジオへお迎え出来たのは望外の喜びであった。

ところで、「白紙」といわれた微用令状によって南方へ出発される直前の中島健蔵氏を私はよくおぼえている。というのは、当時私は東大社会学科の学生で、フランス語を習いたさに、中島先生の「フランス語前期」という講義に毎週出席していたからだ。テキパキした早口の東京弁で、アランの「幸福論」やヴァレリーの「地中海の感興」を訳述される当時の先生のお声と、あれから二十五年も経った現在、スタジオでシンガポールでの異常な体験をお話しになる先生のお声とが、私の脳裡に交錯し、私は不思議な感興を味わった。

従軍された頃の先生は、いまの私よりずっとお若かったわけだが、何年経とうと先生は先生である。本番中、恩師を前にしていつになく私は固くなっていったようだ。

昭和十八年の四月、中島先生は微用解除で東大に帰っておいでになったが、その六カ月後には私たちが軍隊に入るべく大学を繰上げ卒業させられることになっていた。

(三四一朗)

シンガポール攻略のかけに

— 従軍記者の回想 —

〈解説〉

太平洋戦争緒戦の一つのクライマックスは、シンガポールの陥落であった。日本全国は陥落の報に湧き、各地で提灯行列が行なわれ、万才、万才の声が津々田々にこだました。各新聞は、前線に特派した記者たちが書きまくる日本軍——当時は皇軍と呼んでいた——の破竹の進撃の勇ましい記事でいっぱいだった。

こうした戦記報道の一つに大阪朝日新聞に三四回にわたって連載された「マレー戦記」があった。この記事は、マレー戦線に従軍して、シンガポール陥落を見届けた直後、日本に帰還した一人の従軍記者の帰還報告だった。反響はきわめて大きく、全国から記者に対する賞讃や激励の手紙が殺到し、この記事をまとめた単行本はたちまちベストセラーとなった。満州事変から日中戦争と前線に特派された記者たちが書き送った戦争の記録はおびただしい量にのぼっていた。その中でこの報道が特に読者の心をとらえたのは何であったのか。それを解く鍵は、単行本『マレー戦記』の序に、筆者の酒井寅吉記者が次のように書いていること



シンガポール・ブキテマ高地に立った新聞記者らを導く小隊長（正面並立の横方が酒井記者）

問としてとらえ、記事の主役として登場させたのであった。

酒井記者の取材メモは、そういった観点からの観察や感想で埋められていった。そこには砲煙弾雨の中での兵士達の表情がいきいきと描き出されていた。兵が、将校が、人

にあるようだ。

「……絢爛たる文章は私のよくするところではない。興味深く読者を引きずり廻そうとするには私の良心が許さない。私はただ『厳肅なる心』のみでこれを書いた。そして戦争の中から我々が学び或は考え直すべき問題を率直に提出しても見たのである。ブキテマ高地で同僚岩崎俊一君の壮烈なる戦死の姿を見たときから私はこの気持を強くした。戦争を歪められない姿で描き、報告したいといふ強い希望はこの『戦記』を一貫して流れるものである。……」

「戦争を歪められない姿で描き、報告したい」という考えを酒井記者は、戦闘をする部隊という集団ではなく、その集団の中の個人としての一人一人の将兵を見つめることによって実現しようとした。

「……〇〇部隊は快進撃をつづけ、〇〇を占領、〇〇部隊長は………」というような従来の部隊本位の戦争報道のからを脱け出して、身をもって戦っている個々の将兵を人間として何を喜び、悩みながら戦っているのか、戦友愛や肉親への愛が戦闘の中でどんな形で顕現をよぎるのか、そんなことが記録されていった。しかもこの見方は日本の将兵ばかりでなく、敵の兵士や原住民に対しても注がれた。そこには同じ人間としての存在が描かれていた。このヒューマンなとらえ方が、読む人の心をとらえた。しかし、このような報道をけしからんとする軍、特高が、酒井記者に秘かに弾正の手を伸ばしたのであった。

本来非人間的悪行である戦争は、今でもまだ世界のあちこちで続いている。戦争と報道人、どう戦争を報道するかは、読む側、視る側、聴く側でも深く考えられるべき問題である。酒井記者はこの意味で貴重な従軍記者の一人だった。

「……その夜路傍に棄ててあった乳母車を誰かが拾った。忽ち無数のリュックが乳母車に積み重ね、代る代る押すことになった。幾日も幾日も乳母車の征旅が続いた。月の美しい夜、トボトボとマレー街道を歩いていたこの一団はいつの間にか子守唄を合唱していた。『ねんねんころりよ、おころりよ、坊やのお守りはどこへいった……』記者団の多くは祖国に愛児を残す父たちであった。その歌声は真剣であった。兵隊たちがそれに拍手をしてくれた。……」

（酒井寅吉『マレー戦記』より）

△証言者▽

酒井實吉 明治四二年新潟県に生まれる。早大政経学部卒。朝日新聞にはいる。マレー・シンガポール戦線特派員、シンガポール陥落直後海軍、整理部次長となる。『マレー戦記』で朝日新聞第一回「朝日編集賞」を受く。昭和一九年六月「横濱事件」で逮捕投獄される。終戦で無罪釈放され、時事新報を経て東京新聞編集局長、常務となり、現在、総合ジャーナリズム研究所常任理事。

—— マレー作戦に従軍され、前線で戦争の模様を報道するに当たって、どういう心づえでいらっしやいました。

酒井 それまでに——いわゆるシナ事変の報道を通じて、戦争の記事にだいたいもう読者はあきておるといふ時代でした。で私は、単に戦争というだけならば大本営発表にちよつと色をつけばいいんじゃないかと思ひまして、若い記者だったものですからね。そこで、あとで東大の新聞研究所長になられた千葉雄次郎さんが当時の私の上司だったんですから、この千葉さんに、いったい何を報道したらいいんですかと率直に聞いてみたんです。これは、千葉さんはもうお忘れになつていてると思ひますが……千葉さん、ちよつと返答に困つたようですけれど、戦場を構成してゐるものは、兵隊それ自身であると。で、その兵隊さん達の

ものは、なかなかできるものではないと思ひます。またある程度の限界はあるので、その節度は、われわれも心掛けていなければなりません、それにしてもあまりにも、この人間性、つまり個性のない、集団の動き方というふうなものだけ報道され、一般の読者がそれに限をとられた、ということが言えるんじゃないでしょうか。

それは非常にきびしい検閲でしたね、たとえば「戦場の夕暮れ時に鳥が一羽悲しそうな声を出して鳴いていった」というような戦場描写を私がやったことがあるんです。ところが、鳥の鳴き声というのはどうも悲哀感を盛りたてすぎる。戦争に対するいやな気分を読者に与えるんじゃないかということで、鳥が鳴いた部分を消されたり……そこまで細かい神経でやられるものですから、とうていほんとうの姿というものは報道できませんでしたね。それにしても、もうちよつと、戦争というものは人間の集団の行動だつていう、その人間性をえぐりたいというのが私の念願だつたわけです。

—— さて、マレー半島を遊撃して、シンガポール島を前にしたジョホール水道までおいでになつた時は、どんな感じでしたか。

酒井 とうとう来たぞつていう感じでした。で、ちよつとこのジョホール水道ですね。ここを敵前渡河いたしまして

人間としての心理的な状況というふうなものを一つ克明に寫してみたらどうかと、いうふうに言われました。私は、なるほどそうだなあと感じる感じがして、戦場へ行きまして、国家という非常に重苦しい使命の中で、しかしやはり個人というものは人間として生きていなければならぬと、そのへんのかかり合いが戦場ではどんなふうになるのかというふうなことを煮つめたいなあ、と思つて行つたんですけれどもね。なかなかそれは、あの検閲の状況の中では、十分にはできませんでしたが、やはり私はしよつちやう、そういうところに関心はもつておりました。

—— そういう意図でお書きになつた文章は、二重、三重の検閲を経て、われわれが読んだ活字になつたわけですが、それでもなお、やはり人の心を打つたでしょうね。

酒井 全体になんとなく、やはり悲哀感があつて、多少の誤解を生んだんじゃないかと思ひますけれど。

—— やはり実際に行つてご覧になると、いままで伝えられていたものは、人間としての兵隊の姿をゆがめた、つまり美化した姿だ、というふうにお感じになりましたか。

酒井 もう当然そうです。ですから、それは当時の検閲というふうなもの、また仮に検閲がなくても、国家が戦争をしている場合には、敵に有利な報道をしてはいけないことはわかつております。そういう中では、真実の報道という

ね。テンガール飛行場あたりから、ザーッと進軍してきて、

二月一日の紀元節にこのシンガポールを陥落させようという予定できたところが、二月一日には、まだブキテマまでしか進めなかつたわけです。その紀元節の晩に、このシンガポール前線は猛烈な敵の逆襲に会ひまして、これはもう惨憺たる戦争になつたわけです。われわれ報道関係だけで、ブキテマ高地ならびにこの近所の前線でおそらく八人くらい亡くなつたり重傷を負つたりしたんです。ですから報道史上でも珍しいですね。

—— これがブキテマ高地での写真(次頁)のようですが酒井さんは、何を首に下げておられるんですか。

酒井 これは二月二日の朝なんです。

—— するとシンガポール攻略前ですね。

酒井 前です。その前の日、一日の晩に、このブキテマ高地でたくさん兵隊が亡くなつて、それで夜が明けてみたところが、私の社ですつと行動を共にしてきた連絡員の岩崎俊一君が死んでゐる、ということと敵の攻撃がまだ進んでおる最中ですね。まあ、とりあえず死体を埋葬してお別れするということになつたわけです。この時は同盟通信の鯉江さんという人も戦死しまして一緒に埋めたのですが、その時に死体から——こんなことを言つてどうかわかりませんが——小指を切り取り取り白布に包んで、それを胸



真中が酒井記者、首から下げているのが散華した岩崎さんの小指のはいった箱

に下げてですね、ともかくシンガポールにはいる感激を岩崎君にも味わってもらおうということだったんです。岩崎君の連絡員という仕事は、私共の書いた原稿を後方の通信基地へ——そこには無電があるんですが——運ぶという役目で、たいへんりっぱな連絡員でした。

——さてシンガポールが、あの有名なイエスカノーかという降伏交渉を最後におちまして、入城の時ですか、「遺骨を抱いて」という歌ができましたね。

酒井 ええ、この歌がね、ほんとうにシンガポールに入城した兵隊達の実感を表わしていますね。

一番乗りをやるんだと

力んで死んだ戦友の

遺骨を抱いて今はいる

シンガポールの街の朝

シンガポールは陥しても

まだ進撃はこれからだ

遺骨を抱いて俺はゆく

守ってくれよ戦友よ

実にたまらない歌ですね。やはりシンガポールというのは、われわれが子どもの時から伝説のように、大要塞で難攻不落といわれていましたからね。よもやそこをおとせる

とは信じていなかったんですね。またそのシンガポール線は、非常に長い戦場ですからね、だから一眼見て死にたいというのが、作戦に参加した将兵全部の希望だったと思うのです。

——シンガポールでは、入城式というのはなかったそうですね。

酒井 この激戦で多くの将兵が亡くなりましたね、それで入城式というような華かなことをやっちゃいかんということと慰霊祭ということにしたんですね。要するに遺骨にシンガポールを見せるという形の入城式で、しんみりしたものであったんですね。

——威風堂々という感じとはほど違い……。

酒井 もう、兵隊のひとりひとりが、みんな涙を流しながらですね、行進して行っただけです。

——あの歌の文句にありましたけど、シンガポールはおとしましたが、まだ進撃は続くんぞだというのは、今ここで戦勝ムードに酔っていてはいかんぞということは今から思えば暗示しているようにもとれますね。

酒井 そんな感じもしますけれど……。

——どなたが作られたんですか。

酒井 それが、私、わからないんです。

「監」この「シンガポール攻略のかけに」が放送された翌日、

酒井 実際、みんなこの歌にあるとおりの——そういう感じでしたね。

——それだけに、この歌は、みなさんの胸にしみじみと響くわけなんです。ここに、当時、酒井さんが腕に巻いておられた朝日新聞の腕章がありますが、血の汚れのようなのが付いておりますが、これが二七年前のシンガポールの土といっただけですね。

酒井 そうです。洗わないで、今もとってあるんですけれどね。これを見ると、やっぱり当時を思い出しますね。

——戦後、日本軍による華僑の大虐殺ということがいわれましたね。その当時は、もう日本にお帰りになっていたんですね。

酒井 ええ、私はシンガポールが陥落してから——つまり一五日の夕方に陥落して、一六日にシンガポールに初めてはいって、そのあと四、五日してからすぐ内地へ帰された

んです。ですから、その虐殺という話をずいぶんほうほうで聞くんですが、それがはっきりそうであったという証拠は、私は何も知らないんです。

—— 現地の雰囲気では、ありそうだというふうには……
 酒井 それはねえ……実は、マレー戦線全体がきわめて規律きびしい戦争だった。ですから強姦なんてことをやって直ちに階級を剥脱されたなどという事件は、一つくらいしかなかったというきびしいものでした。しかし、やはり、あったことは事実じゃないかと思えますね。いろいろな人がそう言っておりますから……。

—— ところで、シンガポールの攻略後、酒井さんは帰国されて、社命で、今度は国内各地を講演してお歩きになったそうですね。

酒井 ええ、回りました。

—— その間、何か始末書を書かされたというようなことがあったそうですが、それはどういうことだったんですか。

酒井 私は、やっぱり戦勝ムードにある中で、そんなに手放して寫ぶような戦争ではないということと、警告を発する意味で、戦争の実相をある程度話したということと、それが反戦的な気分を普及させるんじゃないかということとで、警察にたしか二回呼ばれて始末書をとられたとい

うことがあるんです。

—— 酒井さんが、当時の政府首脳部にですね、戦争の前途を見通して終戦のいいチャンスを見逃しちゃいかんというような進言をなさったと聞いておりますが……。

酒井 ええ、シンガポールから帰りますと早速、平沼騏一郎さん、それから当時司法大臣をしておられました風見章さん。このお二人に呼ばれて、別々にでしたが、実際の状態はどうなんだと。ま、あの入達は軍の報告しか聞いていないのでしからね。そこで私は、イギリス軍の装備その他を見ても、また戦争の実相からみても、この辺が納め時ではないでしょうか、というようなことを力説しました。お二人とも、だまって聞いておられたんですがね。

—— 酒井さんのお気持ちを通じたんでしょうか。

酒井 だと思いますが、しかしあの入達でもどうにもならないのが当時の政治情勢であり、風潮でした。

—— さて、お帰りになって二年ほどたった昭和一九年の六月に、『中央公論』『改造』の彈圧に端を発した「横浜事件」で、酒井さんは検挙されましたね、あれはどういうことだったんですか。

酒井 直接は何にもなかったんです。ただあの『中央公論』の編集長（小森田一記）がですね、私の昔からの友達だったものだから、彼に私が戦地からいろんな手紙を出

したんですが、その編集長が検挙された時に、その私の手紙が発見されましたね。戦争に対する批判的なものが書いてあるというんで検挙されたんです。『マレー戦記』などでも、私は何もないと思っただんですけれどね。

—— 『マレー戦記』すら、いけませんでしたか。

酒井 ええ、序文に「私は敵愾なる心でこれを書いた」なんてことが……。

—— その序文を読んでみましょう。

「私はただ『敵愾なる心』のみでこれを書いた。そして戦争の中から我々が学び或は考へ直すべき問題を率直に提出してみたいのである」と、このところですね。

酒井 そうですね。で、つまり「敵愾な心」で考え直さなければならぬというのは、いったい何事だというようなことでした。

—— 反戦思想の一環だということですか。

酒井 そういうことです。まあ、読みようによれば、そういうふうにとれるかも知れませんが、私の場合には、そうじゃなくて、やっぱり報道する人間というものはですね。この戦争というものを、いったいどういうふうに出すべきかということだけの関心で、そういう表現が生まれたわけなんですけどね。

—— 今ここに、酒井さんの治安維持法での公判請求書の

写しがありますが、昭和二〇年六月二八日、横浜地方裁判所検事局検事井口清、公訴亦突として、「被告人は中流の家庭に生育して……」と饒々書いてありますが、これは弁護士さんのところに残っております記録ですか。

酒井 そうですね、発見したのはつい最近です。

—— 「ロミンテルンの世界、プロレタリアートの独裁による世界共産主義社会の実現……」きまりきったようなことが書いてありますね。そのほか、朝日新聞にはいっても反戦運動をしたとか、軍隊の中でもやっとなかいらい書いてあるようですね……。

酒井 いやあ、ひどいもんです。デッチあげもひどいもんですね。

—— 拷問でお苦しみになったとお聞きしましたが……。

酒井 あの当時は、拷問ではもう日常茶飯事でしたね。私、そう言っちゃあ悪いけど、今の革命運動家っていうのは、そういう点、非常に幸福だと思うんです。とにかくたいへんな拷問で、これはいくら今の若い者に話しまして、信じてくれないようなひどい拷問でした。

—— どんなことをするんですか。

酒井 それは竹刀で叩く、水道のホースで叩く、鼻に水道の水を入れる、薪の上に坐らせて、その上から靴で踏みつける、それから煙草の火を付けたのを額につけるとか、そ

りやもうたいへんな苦痛を与えるんです。しかも、それが非常に長い期間にわたってやるんです。一回や二回の拷問じゃないんです。私の場合などは、三カ月近く、ほとんど連日、同じような拷問を加えられましたね。

——しかし、酒井さんは、『中央公論』『改造』に直接ご関係なかったのに、ひっくくって拷問を加えた。その目的はなんですか。

酒井 私が調べられた内容から考えますとね。当時、リベラルな傾向をもっておった朝日新聞をなんとかしてやっつけよう、ということじゃなかったかと思えますね。亡くなった緒方竹虎さんとか、先ごろ亡くなった笠原太郎さんとか、そういう人達がリベラルな思想家を、社内で指導したんじゃないかとさかんに私は詰問されました。

——そうすると、朝日新聞のそういった人達を、ひっくくるための端緒を酒井さんに求めたということですか。

酒井 というふうにしか想像できませんね。デッチあげと想像力、その創作力にはまことに驚きました。

——で、釈放されたのは終戦後ですね。

酒井 ええ、終戦と同時に釈放されて帰りました。——一九年の六月の末に朝日新聞の社内で逮捕されたんですね。

酒井 そうです。ちょうど社に留直で泊っております

ね。そのあくる朝、泊まり明けの朝にひっぱられていったわけです。

——しかし、戦争で相当残酷な場面をご覧になり、こんどは銃後の、国内の生活で、同じ民族の日本人が日本人に對して加えた残酷を身をもって体験された……どうお感じになりましたか。

酒井 それがね、私に、どうしてもわからないんですけれど。人間ってのは、ある局面にいくとね、どうしてああいふ残酷な人になるのか、そして、それがちょっと局面が変わったりポストが変わりますとね、きわめてまた善良な市民に戻る。こういったことを、戦場でも、さっきお話にあった内地でもね、いろいろ見せつけられたんで、私にはほんとうにこれがわからないんです。しかし、そういった人間の心理というものを深く掘り下げてみるということが現在の段階では必要なんじゃないかと思えますね。で、戦争という大きな現象の中の人間の心理のいるような動きというものを、われわれはやっぱり報道人としても、もつとつっ込んでみるべきではなかったかという感じが、今にしていますね。

——酒井さんはその後、健康を回復されて、ただ今ではやはり若いジャーナリストを育成されるために毎日ご活躍で……。

酒井 ですからね、今度の戦いで亡くなった大勢の方々には、まことに申しわけないと思っておりますよ。その後二七年も生きておりました。

(昭和四四年二月一七日放送)

参考文献

酒井寅吉著「マレー戦記」昭17 朝日新聞社

酒井寅吉著「戦後ジャーナリズム」昭43 大和書房